

【ポスター発表】

## 保育現場の「気になる子」への支援

—実態調査より—

○ 夙川学院短期大学 高田 さやか (会員番号 5010)

キーワード3つ: 気になる子 発達障がい 親支援

## 1. 研究目的

2015年4月に本格的に始まった「子ども・子育て支援新制度」では、保育園と幼稚園をひとつにした認定こども園の普及、多様な保育事業の量的拡大により2017年度末までに40万人分の待機児童を解消、地域の実情に合わせた地域型保育に加えて放課後児童クラブといった量の拡充や質の向上、保護者が子育てと就労しやすい社会を作ることを目的としている。

2008年の「待機児童ゼロ作戦」により2004年に24245人いた待機児童が保育所定員を約30万人増加したものの、2014年の待機児童が21371人とわずかな減少にとどめているのは、少子化に反して、特に首都圏や近畿圏、政令都市や中核都市では待機児童がなかなか解消されない事態となっている。しかし、女性の就労だけが原因ではなく、労働形態の多様化、虐待やDV、経済的困窮、親の障がい（以下障がいとする）、子ども自身の障がいなど保育ニーズも多様化している。このことから保育園には多様なニーズが複雑に絡み合った困難や課題を抱えた園児が多く入所しているといえる。

保育園では、早ければ1歳ごろからこだわりの強さや癩癩の頻度や激しさ、毎日の積み重ねで同年齢の子ならできることが一人だけできない、何度も同じことを注意しないといけない、言葉の理解が遅い、このような他の園児とは異なる点から、保育士が違和感を抱く「気になる子」が成長と共に明確になり、就学に向けて今後どのように親子共に支援していけばよいのかについて悩んでいることがわかった。

本研究では、「気になる子」の存在を明らかにすることと保育士の目に止まる「気になる子」は、集団生活の中で「困っている子」でもあるといえるため、日々の保育の中での支援方法と同時に親への支援のあり方についても考察していく。

## 2. 研究の視点および方法

2012年4月～2013年3月の間に計10カ所の保育園と幼稚園（1年制）を対象に「気になる子」の実態について聞き取り調査を実施した。園の置かれている環境や市独自の取り組みや特徴があることから、まずはそれぞれの園の置かれている市の取り組み等を聞くことから始めた。そして保育所（幼稚園）での「気になるこども」の実態を明確にするために①気になる子どもの人数②支援に戸惑う、困難だと感じる（気になる子ども）のは、どのような子どもの行動、言動、場面か③気になる子どもへの支援で成功したもの、その他の支援についてあらかじめ調査依頼し、保育士から直接聞き取り、時には園児の様子を

観察することで、さらに詳しい状況を把握した。

### 3. 倫理的配慮

保育園、幼稚園での聞き取り調査に当たっては、事前に調査の趣旨と研究に使用する点について依頼したうえで実施している。なお、園についてもA園、B園というように特定できないよう配慮している。

### 4. 研究結果

異なる地域であって園児を取り巻く実状は多様であるが、それでも保育士が気になると感じる点と「気になる子」の割合には大きな違いがみられないということがわかった。

「気になる子」に挙げた行動は、「指示がとおらない」という意見はどの園にも共通していて、その都度、個別にその子が理解できるように伝えなおすことを行っている。月齢の発達の差があるとはいえ、同じ年齢で1人だけ理解できていないのは、保育士があきらかに「おかしい」と気づくポイントであるといえる。その次に「じっとできない」も多く、動きまわる、集団の場面で離れていく、話がきけないことから活動そのものの参加に支障が出てきている。このような園児に様々な工夫をこらしつつも保護者に園児の様子を伝えることで保護者の気づきへとつなぎ、支援していくために試行錯誤していることがわかった。

### 5. 考察

日々の保育のなかで、集団になじめない、年齢にそぐわない行動が多い、コミュニケーション力が弱いといった明確な「気になる子」から同年代の子と比べて「何となく違和感を感じる」といった曖昧な「気になる子」が存在する。家庭環境や経済状況、保護者の養育能力等から「気になる子」となっている可能性もあるが、そのような背景が見られない「気になる子」に注目してみると発達障がいの可能性が大きいといえる。これらを踏まえて「気になる子」は、「困っている子」であると捉えて、どのような支援が必要なのかについて考察する。